

---

乙女の世界に飛び込んで --- Second season 『二人の銀の姫』 ---

白い鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乙女の世界に飛び込んで . . . Second season  
『二人の銀の姫』 . . .

### 【Nコード】

N3108Y

### 【作者名】

白い鳥

### 【あらすじ】

PC版「二人のエルダー」に、First seasonの主人公を絡ませる。

と言う無謀な企画により始まる当小説です。

キャラメルBOXが製作したデータを元に、二次創作者が自ら作成したデータ（プログラム・画像・音楽・音声・テキスト等）の使用は問題ありません

とのガイドラインにより、第二段となります。

あらずじ。前作主人公が2年生になって、PC版「二人の〜」のあの人達と絡んだら、どれだけグダグダになるか。

です。

## 序章 あの人の始まり 第一話

今日の早春の空は淡い瑠璃色だった。

今日は薰子お姉さまとお買い物をする日だった。

所謂ナンパをしている男性と、無反応に見える女性が見えた。

### \* 瑠璃色

瑠璃色るりいろは、濃い赤味の青。名は、半貴石の瑠璃（ラピスラズリ、英：  
lapis lazuli）による。

半貴石のラピスラズリを粉碎し精製した顔料は、天然ウルトラマリ  
ンである。

ただし、色としてのウルトラマリブルーを群青色とし、瑠璃色と  
区別する人もいる。

勿論、瑠璃の色と瑠璃の粉末の色、天然ウルトラマリンの色は異な  
る。

加工の過程で色合いが変わるのは当然であるが、主要発色成分の化  
学組成は変わらない。

そもそも、ラピスラズリはそれぞれの色合いが異なり、所謂色名で  
指定してもその色合いとは異なり、大なり小なりの齟齬が生じる。

瑠璃は、西洋では伝統的に聖母マリアのローブの色として用いられ  
ていたが、

日本では藍銅鉱からとれる群青が主流で、顔料としての瑠璃は高松  
塚古墳にわずかに使われたとの説があるに過ぎない。

宝石としての瑠璃は、シルクロードの終着駅として大陸との交流が盛んだった時期にさえ、天皇など貴族階級のごく一部が宝飾品（正倉院宝物）としてわずかに所有するのみであった。

後にコバルトで発色させた瑠璃色のガラスも混同されて「瑠璃」と呼ばれるようになったが、これはスマルトに近い。

長広舌ぢやうくわしつを振るっている男に対して、何ら反応をしていない銀髪の女性。

あれはいずれ男が手を出すパターンに見える。

「薰子お姉さま…」

つて声を掛ける前に、もうあの女性の方に行ってるし…

男の顔が紅潮し、異様な熱が入ってきた様だ。そろそろやばい。

「てめえ、何時までも無視してんじゃねえぞ」

ついに男は、女性の手を掴んだ。

「ちよつと」

薰子お姉さまが二人の間に割って入った。

「ちよつとやめたら？その子、嫌がってるじゃない」

男が顔を顰めた。どうやら掴んだ男の手を、力を込めたらしい。

薫子お姉さまと男の言いあいになりだした。

止めに入ったんじゃないの？

仕方なく更に割って入る。

「こんな道の真ん中で、良い大人の男性が、女性と口論ですか？良  
いさらし者ですよ？」

そんな事を言うと、男は遠巻きに見ている通行人達の存在に気が付  
き、逃げる様に立ち去って行った。

「はあ……」

薫子お姉さまがため息を吐く。

「ごめんね司ちゃん。あと、そちらの方、大丈夫？それとも、余計  
なお世話だったかな」

「いえ、助かりました」

女性は一息付いて言葉を続けた。

「助かりましたが、いつもこんな事を？」

「え？まさか……」

「そんな事するから、そう見られるんですよ？だから学院で……」

「あ〜ごめん。ただ、貴女の顔から、SOSが出てる様に見えるから」

薫子お姉さまは女性にそう言う。

「どうしてそう思ったのかは、それは分からないんだけどね。じゃああたしはこれで、行こう司ちゃん」

そう言うって、私の手を握って来た。

「有難う御座いました。それとそちらの方」

女性は私に話しかけてきた。

「はい？」

「同じ銀色なのですね…髪の毛」

「ああ……北欧の方へ行けば結構いると思いますよ？行ったこと無いので知りませんが」

「そうですか…」

話はそこで終わり、私達は買い物を行う事にした。

ほんの些細な出会いだったが、これが彼女との出会いの始まりであった。





序章 あの人との始まり 第一話（後書き）

と言う訳で第二段の始まりです。

第二段も、時間の許す限りお付き合います。

（、（つて「」 飲み物どーぞー

## 序章第二話

桜が散りだす並木道を、少女達の明るい挨拶や雑談があちこちから聞こえてくる。

「おはよう御座います」

「ごきげんよう」

「今日も良い天気ですねえ」

などなど。

外から見れば、恐らくその光景は純粹で美しく、清清しい。

ここはせいおうじょがくいん聖應女学院。

明治時代に設立された由緒ある女学院。日本の近代文化に合わせ、女性にも相応しい教育を学ぶ場所が必要だ。と言う理念に基づいて設立された。

英国のパブリックスクールを原型とし、基督教的なシステムを取り入れた教育様式は、

現在にまで受け継がれている、所謂、『お嬢様学院』である。

\*パブリックスクール (public school)

イングランドおよびウェールズのパブリックスクールは、

イギリスのジェントルマン階層の子弟を養成するものとして、深く

イギリスの社会の中に浸透している。

大部分は寄宿制であり、一流大学進学を前提とする裕福な階層の子ども達が、厳格な規律の下に集団生活を送っている。

自由と規律、公正なスポーツマンシップと互いの尊重など、イギリスの教養ある人士の基本となるものを身に着ける為の学校であるとされる。

この意味でのパブリックスクールはイギリスでもイングランドおよびウェールズのみであり、

同じ国内のスコットランド・北アイルランドでは公立学校を「パブリックスクール」と呼ぶ。

イギリスの「プライベート」は、インデペンデント・スクールのうち、

パブリックスクールに入学するための受験校であるプレップ・スクール(en)

(日本では辛うじて相当しそうなのが予備校。Preparatoryは予備の事)を指す。

これに対して公立学校は地元の生徒のみを受け入れるため「ステート(公立)スクール」と呼ばれる。

#### \* 基督教的なシステム

早い話がキリスト教主義学校である。

学校の管理・運営者をキリスト者とし、聖書やキリスト教を科目として教え、

礼拝などのキリスト教活動を学校行事とすることで、キリスト教の感化を及ぼすことを目的としている。

なお、カトリック系学校はプロテスタント系学校と区別するため、

「カトリック学校」と呼ぶ場合がある。

聖應女学院は戦後再建時に幼稚舎から女子短期大学までの一貫教育施設となるが、

その基本的なスタイルは現在も変わらない。

生徒の自主性を尊重する為、服装規約等の校則はゆるいが、徹底した情操教育の賜物なのか、

生徒内自治がある程度の効果を上げていて、大幅な校則違反は殆どない。

裏を返せば、若干世間から隔絶してしまっている感は否めない。

「おはよう御座います！千早お姉さま、史さん。それに妖精の君」

「なぜ私だけ二つ名なの…」

「う、ごめんなさい。つい…」

「いい加減慣れましたけどね」

「おはよう御座います。今日も良い天気ですね」

似非笑顔を振りまく千早さん。

それでも女生徒達は花が咲くように微笑んでくれる。

私（司）は、立場上は千早さんを『千早お姉さま』とは呼ぶが、個人的にはそうは呼べない。

「それでは私はこれで失礼致します。史さん、又教室で」

「はい。また教室で」

千早さんの横に就いている史さんがそう答え、女生徒が立ち去って行った。

「温室、だわね……本当にここは」

千早さんが独り言の様に呟いた。

「あの……本当によろしかったのですか？」

史さんが千早さんに何かを聞いてきた。

「個人的な事の様なので、私は外しますね」

「申し訳ありません」

何の内容なのかは予想が付く。

あの日、これは始まるべくして始まってしまったのだから……

## 序章第三話

私が千早さんの正体を知ったのは、彼女が転入してくる直前であった。

初音お姉さまとの所用を済ませ、寮の自分の部屋に戻ると、急に眠気が襲ってきた。

そして夢の中では、天に召された筈の姉が微笑んでいた。

「久しぶりね咲ちゃん」

「姉さん。どうしたのですか今日は？」

「うん……なんて言うか、自分で蒔いた種なのに、その芽を刈り取らずに鬱になりかけて、母親の強固な姿勢に負けたとある男の子がいて、その男の子の心を、ほんの少しでも良いから、咲ちゃんに救って欲しいの」

「私は聖應を止める事になるのですか？」

「ううん。それは無いから大丈夫。だってその男の子、聖應に入学してくるから」

「はあ？」

「姉さんは今何と言った？」

… その男の子、聖應に入学してくるから …

「まあ、こんな事言っても信じないよね？でも、聖應には前例があるわ」

「宮小路 瑞穂さん…ですか…」

「うんそうだね。まあ、その男の子が聖應に入る事になる事情を知って欲しいの」

「なぜ私なのですか？」

「貴女は否定するかも知れないけど、貴女は人を引き寄せて放さないオーラを持っているの。」

「言わば、適材適所って所かな…」

「嫌だと言っても無理なのでしょうね、それ…」

「うん、ごめんね。もう既に運命の歯車は回り始めてしまったから」

姉さんがそう言うと、質問する間もなく、舞台は暗転した。

雨の日。

「千早さま……」

悲しそうな声でメイドさんが声を掛ける。

あれ？この子聖應で見た気がする。

「史、少し席を外しててくれない？」

「承知、致しました」

『この男の子の名前はチハヤって言うの、そしてこの子は、不登校をずーっとしているの』

姉さんが説明してくれる。

私は声を出せない。理由は分からない。

基本的に夢の中なので、自分は観客でしか無い。

『切欠は多分、些細な何かだったとは思うの。でもその些細な何かがこの子の禁忌に触れてしまったのよね』

『本人がそれに気が付いた時点で、既に手遅れだったみたい。この子は学校の中で孤立してしまっていたわ』

『学校って言う場所は、言わば閉ざされた空間。どんなに気に入らない相手であろうと、毎日顔を見なければいけない。そんな事とか、言葉が他人を見下しているとか、姿形が女性っぽいとか、そんな疎外される要素をこの子は持ってしまったの』

『そして本人も捻くれてしまって、その後は、さしずめ下り坂を転がっていくボールの様な状態だったわ』



『クラスメイト達との関係悪化も急速に増え、無視や嫌がらせなんかになるのは、非を見るより明らかだったわ』

その寂しそうな顔を見た時驚いた。

以前、薫子お姉さまが道で助けた彼女では無いか。

あの方が千早さんなのか。

運命の齒車。姉さんはそう言った。

あの時に既に、その齒車は回り始めてしまったらしい。

『こんな言い方はどうかと思うけど、咲ちゃんも苛めにあった人の辛さは体験している筈』

まあ、確かにその気持ちは理解もするし、同情も出来る。

でもね姉さん。

何故聖應に入る事になるのですか？

「入りますよ」

千早のいた部屋がノックも無しに開かれ、30歳位の黒髪の女性が入ってきた。

「母さん……」

「千早ちゃん……何時までそうしているの？」

答えは返ってこなかった。

「千早ちゃん……」

母親は泣きそうになるのを堪えていた。

「ずっとこのままでは、貴方は前に進む事すら出来ないのよ？」

「それでね……聖應に転入したらどうかしら？」

は？

「だからね……聖應に転入すれば良いと思うの」

へ？

「あの母さん、何を言って……？」

何を言ってるのかが分からないのでは無い。

その意味不明さが理解に苦しむ。

「聖應はとても良い学院だし、私も、サヤカ義姉さんもまりやちゃんもOGなのよ？」

論点がずれてない？

「あのね母さん。聖應は女学院ですよ？僕が入れる訳が「そんな事

…千早ちゃんは美人さんだもの、  
きっと皆に大歓迎されるわ」「

「そう言う問題じゃな――――――  
―――い」

遂に千早さんがキレた。

「決めました。貴方は聖應に編入して、無事に卒業するのです。  
もし出来なかった場合は、貴方を勘当します」

「良いですね？」

## 序章第四話（前書き）

未だに前作が、一日平均3〜40件アクセスさせている事実にはびびってしまいました。

## 序章第四話

千早さんの聖應の入るまでの話は終わったが、姉さんの見せる物語はまだ続く模様である。

千早さんが、学院長室に入る所から次は始まる様だ。

ノックして帰ってきた声は、私の知る学院長の声では無かった。

声だけで判断すると、まだ若い。

千早さんが部屋に入ると、そこにいたのは梶浦かじうら 緋紗子ひさこ先生がいた。

あれ？梶浦先生は退職したって聞いたけど…どうなってるの？

「始めまして、お話は伺っています。貴方が御門千早君ですね？」

「私は、学院長代理の梶浦 緋紗子です。美倉学院長は現在入院加療中で、その間の業務を私が代わりにお引き受けしています」

「随分とお若い代理ですね。梶浦先生」

千早さんが皮肉っぽく言葉を返した。

「ええ、そうですね。私も頼まれた時はとても驚いたのですが、美倉学院長お世話になりましたから、多少の御恩でも返せればと思ひましてね」

なるほどね。

「やっ」

梶浦先生が千早さんと、一緒にいる女生徒を見つめ、言葉を続けた。

「ふふ、それにしても、御門さんの周りには美少年が多いのね。血筋なのかしら？」

これって遠まわしに宮小路 瑞穂さんの事を言っているよね…？

「…？何の話です？」

千早さんには通じてない模様だった。

「千早君の事ではないの。御門まりやさんって貴方の従姉妹に当たるのよね？私の教え子だったのよ」

「聞いていたお話から想像していたのとは、少し違う性格の様ですね。御門千早君」

「はあ……一体どの様な楽観的な話を聞かされていたのかは知りませんが、出来るのならその愚行にとっと気が付いて、今からでも取りやめて欲しいものなのですが…」

無駄っぽい抵抗を続けるが、なんだかんだで聖應に「女性」として入る事になり、寮に来る事になったらしい。

一緒にいた女生徒、名前を度會 史。彼女も千早さんの侍女として寮に入るらしい。

『私が現状で咲ちゃんに見せられるのは此処までね。彼（彼女？）は貴方が目を覚ます頃には寮に来るわ。千早さんには女生徒の上級生として接して上げてね？』

そして、彼（彼女？）と、史さんが間もなくやってくる。

寮の呼び鈴が鳴った。

ついに登場ですか…

薫子お姉さまがたまたま玄関にいたので、対応する様だ。

私は話をスムーズにさせる為にも、初音お姉さまの部屋のノックをする。

「司です。初音お姉さま、お客様が来ましたよ」

「はい。今出ますね」

そして玄関では

「「あ、貴女は…」」

薫子お姉さまと彼？の言葉がハモっていた。

「あら何？二人とも知り合い？」

香織理お姉さまが二人にそう聞いていた。

「いや、知り合いつて訳じゃないんだけど…」

「…先日は、助けて頂いて、有難う御座いました」

似非っぽい笑顔を出す千早さん。

作り物の笑顔に見えるのは、姉さんの見せてくれたあの夢の所為なんだろな…

それにたじろぐ薫子お姉さま。

「え、いや、その、別に…」

「助けた？」

初音お姉さまもその話に混ざって行った。

「はい。町で男性に声を掛けられて困っていた所を、助けて頂いたんです」

言ってる事は間違っていないけど、経緯が違くありません？

「お姉さま達、そんな所で井戸端会議をなさるおつもりですか？」

「あ！いけない私とした事が、リビングへ案内しますので上がって下さい」

「はい」



千早さんが私の方を見る。

「いっぞやはどうも…折言った話や自己紹介は改めてと言っ事で」

## 序章第五話

「さて、ちゃんと自己紹介しますね」

初音お姉さまが仕切り、自己紹介を行う事になった。

「私が、一応今年の寮監督生を努める皆瀬初音です。何か分からない事があれば、私に聞いて下さいね」

「一応とか言ってるけど、初音はこれでも生徒会長だからね」

\*寮について

正確な名称は聖應女学院女子寮ひぐりやかた櫻館。

つばきやかた えのみやかた ひさきやかた ひらきやかた  
椿館、榎館、楸館、柊館の4つがかつては存在していた。

現在は寮が一つしか残っていないためにその名称が使われることは無く、正式名称は聖應女学院女子寮に変わっている。

「えと、次は香織理ちゃん」

「え？ああ、はいはい」

香織理お姉さまは紅茶をトレイに載せた状態で返事を行い、千早さんと寮生全員に紅茶を配って行った。

「さあ、お茶をどうぞ」

「香織理お姉さま。そう言うのは私の役目かと…」

「まあ、偶にはね……で、自己紹介したわよね。私は神近香織理、3年生よ。仲良くして頂戴」

「よろしく願います」

「はい。じゃ次は薫子ね」

「へ！？ああ、うん」

なんつー返事してるのやら……

「ええつとぉ。あたしは七々原薫子。3年生。よろしくね」

「ええ。こちらこそどうぞよろしく」

千早さんが似非っぽい笑顔で返した。

「どうしちゃったの？なんだか薫子ちゃん、さっきからちよつと変じゃありません？」

「去年の4月の嵐が再び、じゃないのですか？」

初音お姉さまの問いに私がそう答えた。

「えっ？……ああ、そんな事もありましたね。あとは司ちゃんね」

「ああ、忘れていました。神加賀美司と申します。2年生です。本名は違うのですが、学院では『司』で通っています」

「え？じゃあ本名は何なのでしょう？」

まあ、そう聞いてくるでしょうね。

「家庭の事情が絡むので詳しくは省きますが、『咲』が本名です。これは寮内のみ使える名だと解釈しておいて下さると助かります」

「分かりました」

「後、そちらの方もお願いします」

初音お姉さまが千早さんの隣の女生徒に聞く。

「あ、はい。度會史と申します。2年生です。千早様の侍女として寮に入る事になりました。よろしくお願いします」

「侍女？」

薫子お姉さまがそんな質問をしてきた。

「侍女です」

「侍女って何？」

「侍女って言うのは、lady's maidまたは handmaidと訳される、

王族・貴族または上流階級の婦人に個人的に仕えて雑用や身の回りの世話をする女性ですね。

いわゆるメイドと呼ばれている存在も該当するにはします」

薫子お姉さまに対し、私はそう答えた。

「あゝなるほどね。つまり史ちゃんも千早さんの召使いっばい存在なんだ」

「極端な言い方をすればそうなります。度會家は代々、千早様の妃宮家にお仕えしている家なのです。

私は元々聖應の生徒ですが、この度千早様が転入されると言う事で、一緒に寮でご厄介になる事にしました」

「来たばかりで右も左も分かりませんので、ご迷惑をお掛けする事も多いとは思いますが、これからどうぞよろしくお願いしますね」

と千早さんが締めくくった。

「さつきから気にはなってたんだけど、千早さんのその髪の毛で染めているの？綺麗な銀の色しているけど」

と香織理お姉さま。

「香織理お姉さま？それは私にも聞かれた質問だった気が…」

「ああ、そんな事もあったわね…」

「私の身の上の事は以前お話ししました。千早お姉さまも同じでは？」

「お姉さま？」

千早さんが怪訝そうに聞いてきた。



## 序章第五話（後書き）

前置きが長ええw

まだ続きます。

## 序章第六話（前書き）

香織理が司をちゃん付けするのは、セカンドシーズンの仕様ですw

クリスマスネタ？

知らんがな（、・・・）



## 序章第六話

私が千早さんを『お姉さま』と呼んだ理由は、新しく入る予定の1年生が来てから寮の規則や仕来りを詳しく説明する。

と言う事になり、初音お姉さまと一緒に部屋に案内されに行った。

「彼女…」

と香織理お姉さまが独り言の様に呟いた。

「何がでしょう?」

「司ちゃんと同じ髪の色を見るのも珍しいけど…」

「けど?」

「なんて言ったら良いのかしら、何かしらの影を背負っているわね」

「香織理お姉ちゃんだって、人に言えない秘密の一つや二つはあるでしょ?」

「その『お姉ちゃん』は、私たちはいい加減慣れたけど、千早さんの前で言うべき言葉なのかしらね?」

と薫子お姉さま。

「どうなんでしょう…状況に応じて、では無いかと」

たまたま私がテラスでぼうつとしていたら、千早さんと薫子お姉さまがテラスにやってきた。

「あれ、司ちゃんと千早さん…どうしたの？こんな所で」

「お部屋の片付けがひと通り済みだったので、一休みしている所です」

一瞬言葉に詰まって、言い訳っぽい言い方を千早さんは言ってきた。中身が男性だとは知られる訳には行かないから、女性っぽい言い方をしようと切り替えたのでしょね。

「もう片付いたの？あたし、千早さんはものすごい荷物を持ってきたって勝手に想像してた」

「家の荷物全部持ってくる訳じゃないでしょうに」

私の突っ込みに薫子お姉さまが苦笑いした。

夕食時。

テーブルの上に鎮座している一羽丸まるのローストチキン。

その他にもマッシュドポテトなどが場所狭しと並んでいた。

「作りかけにも見えるのですが、そう思うのは失礼なんでしょうか

…」

史さんがそんな感想を言っ  
て来た。

「それが素直な感想だよね…  
あたしも最初に見た時はそ  
うだったもんなあ…」

薫子お姉さまが笑いながら  
そんな答えを言っ  
て来た。

「それにある意味た  
だしいのかしらね。ここ  
から、みんなの好きな  
量だけ食べたいのを皿に  
取って、

ワンディッシュ  
一人前に仕立てるの。所  
謂、ヴァイキング料理  
ね」

「二人とも今日の所は  
好きな場所に座っ  
てちょうだい。食事の前  
にお祈りをしますから」

香織理お姉さまの説明し  
ている中、私は準備し  
ていた紅茶を全員に  
配った。

「司ちゃん有難う」

「いえ、今日はお二人の  
入寮記念と言う事で、  
モニターニューブルー  
にしてみました」

\*モニターニューブルー

ラベンダーと各種フルー  
ツフレーバーのミックス  
ストレートティー・アイ  
ステイヤーが主な飲み  
方。  
濃い茶色の中国産セイ  
ロン紅茶。

「また新しい紅茶ね。一体何種類レシピ持ってるの?」

「さあ?数える気にもなりません」

そして席に座り、初音お姉さまが祈りを捧げ、食事が開始された。

「あ、千早様、給仕でしたら史が」

え?

「史?ここでは二人とも学生同士なのだから、そんな事はしてくれなくても良いのよ」

嗜む様に千早さんが史さんに言った。

「ふふつ、なんだか給仕出来なくて残念そうな顔するのね、史ちゃんは」

いつも家でやってる事とはいえ、立ち位置が違つて言うのを気が付いていないのか、これが地なのか...

「ふくん...ねえ、史ちゃんがそうしたいのなら、千早さんさせてあげたら?」

「え!??」

そんなやり取りを他所に、私は自分の分を取ろうと身を乗り出す。

「私が…」

と史さんに止められた。

「いやでも、同じ2年生ですし…」

「やらせて下さい」

なんと言う押し。

「史としては、お給仕させて頂けると嬉しいです」

どうするの千早さん？

と言う問いかけの視線を送ってみた。

「嫌では無いのだけど…そうね、では皆様の分も給仕してあげて？  
それなら良いわ」

「では、皆様の分もお給仕させて頂きます」

周りが止める間もなく、史さんは大皿を手に持ち出した。

なんと言う実力行使。

これはもうやらせるしか無さそうだ。

「綺麗…まるで料理雑誌に載っている写真みたいね」

とは香織理お姉さまの感想。

「仕える方の健康をも気遣うのも、仕事のうちと、そう心得ておりますので」

本職のメイドさん強し。

まあ、そんなこんなで、史さんが給仕をする事に異論を挟めなくなつてしまった。

「これは…私も仕事をしなくて済むかも知れませんか」

「それは認めませんよ？司ちゃんの出す変り種の紅茶は、毎回楽しみにしているのよ？」

と初音お姉さま。

え〜。だって本職さんがいるじゃんか…

と、まあ口には出さないが抗議してみた。

「目が何か言ってますよ？今夜の当番は誰でした？」

ちよ。

いきなりそれをやるのか？

あの『私と言う名の抱き枕』を…！

こうして、波乱の一年間は始まった。

## 序章第六話（後書き）

年内投稿はこれにて打ち止めです。

年明けの初詣ネタは……多分無いw

約9000字前後で切ってる1話分を、約1800字と言つ2倍にして見たが、

『なげーよw』とか言つ意見は来るのだろうか……

こなければこのまま1800字近辺で様子見します。

正月記念、特別挿入話（前書き）

明けましておめでとう御座います。

昨年同様テキストに当作品を御自愛下さいます様、御願ひ致します。

テキストとかWWW



## 正月記念、特別挿入話

「「「「開けましておめでとう御座います」「「「「「

ここは聖應女学院高等部女子寮。

こんな挨拶で元日の朝は開けた。

「昨夜、富士山らしき山の夢を見ました」

「えっ！？それって今年の縁起は良いって印だよね」

\*初夢に見ると縁起が良いものを表すことわざに「一富士、二鷹、いちふじ にたか三茄子」というものがある。  
さんなすび

江戸時代に最も古い富士講組織の一つがある駒込富士神社の周辺に鷹匠屋敷があった事、駒込茄子が名産物であった事に由来する。

「駒込は一富士二鷹三茄子」と川柳に詠まれた。

その他にこの3つの組み合わせは、「狂歌・家つと」、「続五元集」、  
、「狂歌・巴人集」、「譬喩尽」、  
、「黄表紙・盧生夢魂其前日」、「笈埃随筆」、「嬉遊笑覧」、「甲子夜話」、

「俚言集覧」などの文献資料に記載されており、江戸時代初期にはすでにあり、それぞれの起源は次のような諸説がある。

徳川家縁の地である駿河国での高いものの順。富士山、愛鷹山、初

物のなすの値段

富士山、鷹狩り、初物のなすを徳川家康が好んだことから

富士は日本一の山、鷹は賢くて強い鳥、なすは事を「成す」

富士は「無事」、鷹は「高い」、なすは事を「成す」という掛け言葉

富士は曾我兄弟の仇討ち（富士山の裾野）、鷹は忠臣蔵（主君浅野

家の紋所が鷹の羽）、茄子は鍵屋の辻の決闘（伊賀の名産品が茄子）

四以降については地域・文献などからいくつか存在しており、それ

についても諸説ある。

四扇（しおうぎ、よんせん）、五煙草（多波姑）（ごたばこ）、六  
座頭くわとう

「俚言集覽」に記載があり、同内容を挙げた辞典類の多くはこれを  
出典としている。

一説として、一富士二鷹三茄子と四扇五煙草六座頭はそれぞれ対応  
しており、富士と扇は末広がりで子孫や商売などの繁栄を、

鷹と煙草の煙は上昇するので運氣上昇を、茄子と座頭「4」は毛が  
ないので「怪我不い」と洒落て家内安全を願うという。

四（または五）を「葬式・葬礼」としたもの

四そろう（葬礼）に五せつちん（雪隠、便所） / 四葬式、五

雪隠 / 四雪隠、五葬式

四葬礼、五糞

四に葬式、五に火事 / 四葬式、五火事

俗信により、逆夢としたり、予兆としたり、内容によって良悪が違  
うなど、いくつかの解釈がある。

「そつらしいですね」

そう言いながら、目が赤い司が、重箱に入れたおせち料理を姉達の  
前に並べだした。

紅白かまぼこ、伊達巻、栗きんとん、昆布巻き、お多福豆、紅白なます、<sup>かぶ</sup>蕪の酢の物、ちよろぎ、酢蓮、鰯の焼き物、鯛の焼き物、海老の焼き物、鰻の焼き物、くわい、蓮根、牛蒡、たたきごぼう、里芋、八つ頭、更には雑煮まで並べられた。

「司ちゃんこれって…」

「おせち料理ですが何か？」

「まさか、独りで作ったの？」

「まあ、その辺は内緒と言う事で…」

「司ちゃん、目が真っ赤だよ……」

この時点で姉達は気が付いてしまった。

司が徹夜してこの料理を作った事を。

「司ちゃんっ！大好きですっ」

姉の一人が司に抱きつき、他の姉も追従する様に司に抱きついた。

落ち着いた所で姉が司に、

「私達で出きる事は無い？」

と聞いてきた。

すると司は、

「今日この寮にお客様が4人来る予定です。その方達の為に料理はまだ食べないで上げて下さい」

と返した。

「誰が来るの？」

と聞くが、

「9時頃には来て下さいと御願いしたので、直ぐに分かると思いますが」

と笑みを浮かべるだけの返事しかなかった。

午前8時40分。

寮の呼び出しチャイムが鳴った。

「はい」

初音が反応し、玄関へ行った。

玄関にいたのは、かつて聖應で姉と呼んでいた人がそこにはいた。

「おひさしぶりなのですよ、初音ちゃん」

「か……奏お姉さま？」

「はいなのですよ。今日は司ちゃんに、『寮で一緒におせちを如何ですか』と電話をもらって、飛んで来たのですよ」

そんな話は聞いていない初音達であった。

「奏お姉さまが来るなんて話、聞いてませんでした…」

「そうなんですか？じゃあ驚かせようと言う、司ちゃんの計画なのでしょうね」

「あ、奏さんが一番乗りなのです。もうちょっと早くくれば良かった…」

そう言う声が奏の後ろから発せられた。

「え？由佳里お姉さま？」

「初音ちゃん、お久しぶりね。元気そうで何よりだわ」

「あーはい！と、とりあえずリビングまでご案内します」

「去年までこの寮にいたのだから、その辺は大丈夫よ」

由佳里と奏が連れ立ってリビングへ行くと、そこでも同じように寮生達は驚いていた。

今年寮に入った千早や史の紹介も軽く行い、雑談などが花を咲かせた。

よくよく思えば、今日に限って座る椅子の量が多いのは、この為なのかと初音達が納得していた。

8時50分

再び寮の呼び出し音が鳴った。

こんどはだれだ来るのかと、期待と不安で再び初音が出た。

そこにいたのは響姫であった。

「響姫お姉さま……」

「はい。初音ちゃん。開けましておめでとう御座います。そしてお久しぶりです」

「は、はい。開けましておめでとう御座います。あの、響姫お姉さまも司ちゃんに……?」

「ええそうですよ。所で司ちゃんは何人来ると言っていましたか?」

「4人と聞いてます」

「そうですか……場合によってはもうちょっと増えるかも知れませぬ」

「それは…どなたでしょうか？」

「司ちゃんが言っただけなら、私からは言えませんね。まあ直ぐに分かると思いますよ？」

と、謎の言葉と共に、リビングに案内される響姫であった。

9時

三度目の呼び出しが鳴った。

玄関に立っていたのは、数人のメイドに荷物を持ってもらっていた紫苑であった。

「し、紫苑お姉さまも司ちゃんに呼ばれたのですか？」

「ええそうです」

「それで、後ろの方達は…？」

「ああ、この方達は、私がとある方達に御願いをして、お手伝いをして下さっている人達です。」

…申し訳ありませんが、荷物を中に運んで下さいますか？」

紫苑がメイド達に向けて言った。

メイド達は一礼をして、あっと言う間に荷物を寮生の邪魔にならない場所へ運んで行った。

司も予定外の追加は、この後来る事になる。



正月記念、特別挿入話（後書き）

一話で終わる予定だったが終われなかった…  
（・・）シヨボーン

## 正月記念、特別挿入話その2（前書き）

当挿入話の設定では、誰かが誰かと結ばれている。  
なんてのはありません。

## 正月記念、特別挿入話その2

「さて、これで私が呼んで来て下さったお姉さま達が揃いました。お姉さま達、今日は我俣を聞いて頂いて有難う御座いました」

「めったに聞けない司ちゃんの我俣ですから、何をさて置いても来ますよ。

ねえ奏ちゃん」

「そうですね、紫苑お姉さま」

「では軽く自己紹介などしつつ、おせちを召し上がって「ちょっと待って司ちゃん」…はい？」

「申し訳ないけど、恐らくあと一人…いえ二人増えると思いますわ」と紫苑。

「え」と、それは誰でしょうか？」

「ヒントは、こちらのメイドさんですね」

と紫苑が独りのメイドの方を向く。

「織倉 楓と申します。以前に司様とはお会いになっているかと存じます」

と言いながら、そのメイドは恭しく礼をした。

「楓さん…って事は…まさか…」

「そのまさかだと思えますよ？」

\* 織倉 楓

嫡木家の家政婦長で、慶行の筆頭秘書。

幼いころに母親を亡くした瑞穂にとっての母親代わりでもある。年齢不詳であるが、『やるきはこ2』の紫苑シナリオ（本編の2年後）の時点でぎりぎり20代である。

メイドとしての技量は完璧だが、瑞穂によると稀に大失敗をやらかしてしまう。紫苑とは似た者同士で意気投合する。

Wikiより抜粋。

「それはまさかの…頭文字に宮と付いたりしますか？」

「大当たりです」

「それが二人となると…もうお一人は、名前に貴とか…」

「はい」

紫苑と司の会話に、他の寮生やゲスト達は付いて行けなかった。

「あ、あの、それって…」

奏が聞こうとした時に、四度目の呼び出し音が鳴った。

奏が玄関に行くと、懐かしいあの人がそこにはいた。

史上最多得票数の伝説のエルダー・シスター。

「み……瑞穂お姉さま……」

「お久しぶりね奏ちゃん。開けましておめでとう御座います」

返事は、返って来なかった。

奏が瑞穂に全身で抱きよっていたいたからである。

「あらあら……卒業しても瑞穂お姉さまの人気は変わりませんね……」

瑞穂の後ろからそんな声があった。

はっと我に返り、その声の主を確認すると、

「会長さん……いえ失礼しました……貴子お姉さま……」

「はい、御機嫌よう。お元気そうでなによりですわ」

こうして二人もリビングに案内された。

「す……凄い……」

寮生なのかゲストなのか、誰かがそんな一言を漏らした。

それは果たして、出ているおせち料理の種類や量についてなのだろうか。

はたまた、呼ばれて出席しているゲストの層々たるメンバーに対してなのだろうか。

代71台エルダーシスターを拝命した十条紫苑。

代72台エルダーシスターを拝命した宮小路瑞穂。

代74台エルダーシスターを拝命した周防院奏。

代72台生徒会会長の巖島貴子。

代74台生徒会会長の上岡由佳里。

セイレーンの君と言う二つ名で未だに語られる魚住響姫。

寮生である千早や史から見れば、一体どうやればこんな名のある人々と人脈を築けるのか。

と思ってしまう状況であった。

挨拶から始まり、司との関わりや、今の寮の生活等、多種多彩な雑談がリビング内で花開いていた。

そんな中、全員の前にそつと、本当に澄んだ赤色をした紅茶が出てきた。

香「司ちゃんこれは？」

「おせちとか正月に会うかどうかは怪しいですが、縁起物と言う事でローズヒップティーです。国産のべにひかりと言うのも手だったのですが、時間が足りなかったのでこちらにしました」

初「いつもいつも有難う…」

「御気になさらないで下さい。私が勝手にやっていることですから」

紫「今回のこの集まりの話のおねだりを聞かされた時は、凄く素晴らしい事だと共感して、

思わず瑞穂さんと貴子さんも呼んでしまいました」

瑞「確かにあれは驚いたわ。いきなり聖應の寮でお正月を皆さんで楽しみましょう。でしたから…」

紫「貴子さんも、来てくださって有難う御座います」

貴「いえそんな…私は家に誰もいなかったので渡りに船でした」

響「本当に、層々たる顔ぶれですね。去年の1年で、これだけの人脈を作れたって、

ある意味司ちゃんは素晴らしい子ですね」

由「司ちゃんもおせち食べないと無くなりますよ？…あれ？」

ふと司を見ると、司は椅子に座ったまま眠ってしまっていた。

紫苑が司を起こそうと声を掛けようとした。

「司ちゃ 紫苑お姉さま、待って下さい」「どうしたの初音ちゃん」

「司ちゃんは、この料理全てと紅茶を徹夜して作ってくれました」

「これを……全て……」

ここまで言われれば理解出来ない姉達では無い。

貴「昨夜寝てない…そう言う事ですか？」

初「その通りです、お気づきになっていたお姉さま達もいたかとは思いますが、

司ちゃんの目が真っ赤でした」

奏「ああ、やっぱりそうだったのですね。何か違う気はしていません」

紫「そうですか…それでは私の計画は白紙に戻さなくてはいけませんね」

瑞「紫苑さんは何を計画していたのですか？」

紫「このメンバー全員で初詣はどうかと思って、晴れ着を持ってきてもらいました」

瑞「楓さんに内緒話をしていたのはそれだったのですね」

貴「紫苑様らしいところと言つべきなのでしょうね…」



響「別に今日では無くてもよろしいのでは？」

紫「今日はここで泊まって、明日行くと言っつのはどうでしょう？」

初「じゃあ、司ちゃんを皆さんでそつと運んであげませんか？風邪をひいてはもともともありませんし」

翌朝、紫苑が目には涙を溜めて上向き加減で司を説得し、全員で晴れ着で初詣に行く事となった。

説得した際、紫苑の手の中には目薬があった事など、司は知らなかった。

正月記念、特別挿入話その2（後書き）

瑞穂が何処に泊まったか？

御想像にお任せします。

## 第一章 二つ目の呼び名 第一話

朝の紅茶の用意をしていると、朝には早い初音お姉さまがやってきた。

「おはよう司ちゃん」

「おはよう御座います初音お姉さま」

「今日のお茶（紅茶）は何ですか？」

「変り種のルフナ紅茶ですね。スリランカ産で、なんとミルクにはヤギのミルクを使います」

「うわ〜。代わってるわねえ」

### \*ルフナ紅茶

実在する紅茶。

得意な自然環境の中で育成されるため、あまり個性がないと言われているロウグロウンティーの中でも、ユニークな味わいをもっています。ほどよい渋味と、いぶしたようなスモーキーフレーバーが特徴です。

水色は、発酵が強いので深みのある濃い赤色が特徴で、ミルクティーにするときれいなクリームブラウン色が楽しめます。

サウジアラビアではヤギのミルクを使ったミルクティーに用いられますので、

ミルクティーやチャイにして個性あふれる風味を楽しむのも出来る。

そんな話をしていると、千早さんと史さんがやってきた。

「おはよう御座います」

「おはよう御座います。千早お姉さま、史さん」

「おはよう御座います。早いんですね、初音さんと司ちゃんは」

「誰かさん達の抱きま」わ〜わ〜わ〜！「はいはい、言わなきゃ良いんですね」

「「?」?」

千早さんと史さんがハテナマークを浮かべている。

「まあ、お姉さまの為に朝のお紅茶を淹れてたものですから、すっかり習慣になってしまっていて…」

まあその言い訳は間違っていない。

私が入寮する前までは、由香里お姉さまの世話係だったのは事実。

「お姉さま？初音さんはお姉さんも聖應の生徒でいらっしやっただのですか？」

千早さんがそんな事を聞いてきた。

「え？あ、いえ、そうではないんです」

「初音お姉さま？寮や学院の仕来りは説明なさってないので？」

「いえ、昨夜私が千早様には軽くお話したのですが…」

「ああ、上級生を名前の後ろに『お姉さま』と呼ぶあれね」

「お姉さま方の面倒を見るのは、この寮では後輩達の務めと言うか仕来りなのです」

「立ち話もなんですから、お座りになってはどうですか？お茶は運びますから」

初音お姉さまと千早さんの話に割って入った。

「ああそうですね」

初音お姉さまと千早さんが、テーブルに座った。

「私もお手伝いします」

と史さんが手を出してきた。

文句を言える立場でも無いので、ソーサーに茶器を乗せ、テーブルまで持って行き、とりあえず今いる人数分の紅茶を淹れた。

「フレーバーの香りがするわ、普通の紅茶ではないのね…」

千早さんがそんな感想を言って来た。

「これはフレーバーティーですか？」

と史さんが聞いてきた。

「これはルフナ紅茶と言うそうよ」

私の代わりに初音お姉さまが答えてくれた。

「ミルクはヤギのお乳を使う変り種ですけどね…スリランカ産の紅茶です」

「へえ〜司ちゃんは紅茶には詳しいの？」

「まあ入院とか自宅療養でその手の本を読んだり、教えてもらう機会が多かったですからね」

「入院……ですか？」

「ええそうですね。まあ、詳しいお話を聞きたければ、寮のお姉さま達に聞いてください」

「この寮で朝一杯の紅茶を頂くのは、家で目覚ましに日本茶を飲む事の代わりの様な物ね」

私が振った話を打ち切るかの様に初音お姉さまが言った。

空気を読んでくれれば乗っってくれるだろう。

「目覚めの一杯、と言う所ですね…頂きます」

どうやら千早さんは空気を読んでくれたらしく、紅茶を口に含んでくれた。

「フレーバーの香りを楽しみつつ、ヤギのミルクを入れて更にミルクティーとして楽しめる。」

朝から飲むには、ちょっと贅沢な気もしますね」

そんな感想を千早さんがした。

「おはよう…あら、司ちゃんの紅茶ね？私にももらえるかしら？」

香織理お姉さまがりビングにやってきた。

席に着いたのを見て、香織理お姉さまに紅茶を入れて上げる。

「起きてくるかどうかも分からない私にも用意してくれて、司ちゃんありがとう」

「起きてくるかどうかとか…そんなに抱きm「わーわーわー」…又ですか…」

「所で二人とも、昨夜は良く眠れたかしら？」

香織理お姉さまが千早さんと史さんに聞いてきた。

「慣れない場所で気を張っていた所<sup>せい</sup>為か、いつの間にか夢も見ずに眠っていましたね」

「私は少し、眠りが浅かった様です。やはり気を張っていた所<sup>せい</sup>為で

しょうか…」

そんな返事が二人から帰って来た。

香織理お姉さまが紅茶を啜った。

「さて……そろそろお寝坊さんを起こしにいきましょうか」

初音お姉さまが席を立ってそう言った。

「それって、やっぱり私の仕事なんですよね…？」

恒例行事とは言え、とりあえず聞いてみた。

「それが一番てつとり早いでしょうね…」

やっぱりかい。

薫子お姉さまの部屋にノック無しで入り、未だに寝ている薫子お姉さまの耳に息を吹きかける。

「お姉ちゃん。早く起きないと朝ごはん抜きですよ？」

「ひゃっ…！」

薫子お姉さまが驚いて飛び起きた。

「つつつつ司ちゃん、その起こし方は止めてって言ったでしょう…」



「だったら自力で起きて下さいね？薫子・お・ね・え・さ・ま？」

「~~~~/~/」

勝った。

この技は効くが、自己嫌悪する弱点がある。

-. -. 千早 side -. -.

司ちゃんがリビングから出て行った。

「……薫子さんは、もしかして朝が弱いのですか？」

「もしかしてと言うか、まあものすごく弱いわね。司ちゃんに鍛えてもらってるけど、まだまだだね」

「そうなんですか……」

かなり朝は弱い。と印象付けるのには、もっともらしい返答は帰って来た。

「何しろ自分の『お姉さま』に起こされてた位だったしね」

「お姉さま……ですか……」

「ああ、ここで言うお姉さまの話は説明したと思いますが……」

初音さんがそう言って来た。

「下級生が上級生に対して、名前の後ろに『お姉さま』と付けるのは聞いてます」

「ええそうね、で、まあ、この寮の中の仕来りでね、下級生はそれぞれ特定の上級生の世話係に任命されて、逆に世話をされる上級生は、その下級生を指導する義務を負う、と言う慣例があるの」

「まあ、現状は司ちゃんがそれをやってるんですけどね」

香織理さんの説明に、初音さんがそう付け加えた。

司ちゃんか…

何だろう、あの子がいる空間が居心地良く感じるのは気のせいなんだろうか…

… 千早 sideend …

**第一章 二つ目の呼び名 第一話（後書き）**

1800字どころか、2494字W

長すぎワロエナイ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3108y/>

---

乙女の世界に飛び込んで --- Second season 『二人の銀の姫』 ---

2012年1月4日10時59分発行